

象が外國との間における交通事情に依つて影響を被ることの多かつたのは勿論のことである。凡そ東西の交通は支那や塞外に大勢力が出現して、統一の範圍が擴まれば擴まるほど發達を示すのは當然であるが、宋代には漢民族の勢力の外に振はなかつたに反して、契丹の勢は天山地方までも伸び、晩唐以來のこの地方の分裂はこゝに統一を見ることになつた。そこで契丹の聲譽は遠く傳はり、これを目指して西方諸國の陸路による東方への交通は頻繁となつた。その後起つた蒙古は歐亞兩大陸にかけての大版圖を拓き、政治軍事の必要から交通路の保安と設備とに努力したので、こゝに周知の如く四方の交通は劃期的の躍進を示すことになつた。

一方海路の交通においても、唐代に接して宋・元と時代を降るに従つてその範圍は益々進展し、支那船の印度、ペルシャ、南洋諸島に赴くもの少くなかつたと共に、ペルシャ、アラビヤ地方の人がその優れた航海術によつて支那に來航するもの甚だ多かつた。

交通發達に伴ふ東西文化の交渉

これ等海陸交通の主要なる目的は商業上の貿易であつたことは勿論であるが、これに伴ふ必然の結果は相互間の文化の傳播である。殊に元代における蒙古族の對世界文化の態度は上述の如くであつたから、特別に保護を加へたものも少かつた代りに、相互文化の傳播を妨げる如き方針を取らなかつたから、西方の宗教學藝技術等はみな支那に傳はり、世界的文化の色彩を發揮することにおいて、唐代に過ぐるものがあつたといつても過言でない。従つて蒙古の勢力が長く續いたならば、歐人の東方航路の發見を待たずして、歐洲と東亞との文化の交渉は、早くも甚だ